



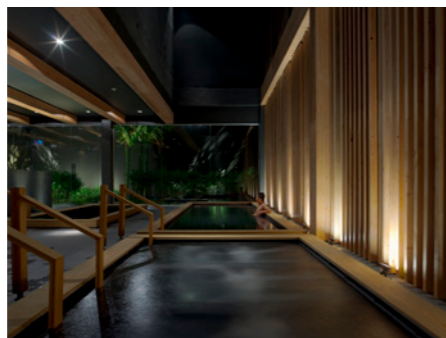
ラノーンでは古くから温泉に親しんできたせいか、温泉水を利用した化粧水や石鹸なども作られている。



サンカンペーンの公営温泉はチェンマイ近郊の人達の憩いの場所。多くのタイ人にとって温泉は足湯と温泉卵である。



さすが温泉町ラノーンの人たちは温泉に浸かる習慣を持っている。ジャングルの中の露天風呂はタイならではの楽しみ方。



バンコクの中心地スクンビット・ソイ26にオープンしたスーパー銭湯「湯の森」。



チェンマイ郊外のサンカンペーンの温泉は、常時10数メートルの高温の温泉水を噴出している。専門家が見て驚く世界的に見ても稀な温泉だ。

日本人にとってジャングルの中の露天風呂とはなんとも魅力的。筆者も出張の疲れをここで癒すことが出来た。ラノーンは温泉の町を自認するだけあり、この温泉施設も日本人が利用するのに違和感はない。ただし、水着の着用は必須である。日本のガイドブックではあまり紹介されないラノーンであるが、温泉だけでなく「ミャンマーの日帰り観光」なども楽しめるほか、沖合の島々は天然度100%と言えるビーチに高い透明度の海で、当然ヨーロッパ人のリゾートとなっている。他にも実に多くの観光資源に恵まれていて、南部にはユネスコ生物圏保護区に指定されている大マングローブ地帯が広がり、ガオ滝の落差数百メートルは恐らくタイ一だろう。とにかく周辺の自然環境は見事で、珍しい種類の動植物も多い。カオソックでは乾季に咲くラフレシアが、ラノーンでは雨期に咲くのも不思議である。また、中心街には華僑によつて開拓された時代の古い町並みが残り、シンボルトギース様式の建物が多い。最近化粧直しをして、お洒落な店舗やブティックホテルになっているところもある。さすがはタイと言わばか、一年前にデザインホテル「ナムサイ・カオスアイリゾート」が進出し、今では町のランドマーク的なホテルになっている。

「外資に負けないホテルマーケティング」
最大の津波被害地カオラックにオープンした奇跡の誕生秘話の「サロジン物語」と、海外のホテル、主にタイのホテルと日本のホテルとを比較・論じた誰でもわかる解説本。
ダイヤモンド社 1995円

1952年生まれ。サンヨーインターナショナル代表。海外の独立系ホテルの日本でのマーケティングを行っている。特にタイとは30年以上の関わりがあり、タイのツーリズムホテルマーケティングには強いこだわりを持っている。
サンヨーインターナショナル
http://www.hotelmarketing.jp.com/

タイ観光資源としての温泉 ラノーン温泉がタイ温泉ブームの 火付け役となるか!?

タイランド再発見！スペシャルツアー



ラノーンにもデザインホテルのトレンドがやってくる。「ナムサイ・カオスアイ」は高級ホテルだが、地方都市だけあってお得な価格設定になっている。

日本人である我々が、休暇でいく国内旅行をイメージすると、多くの人は温泉を思い浮かべるのではないだろうか。たまの休日には近所のスーパー銭湯や近郊の日帰り温泉でゆっくり過ごすという人も多い。

掘削技術の進歩で、今や温泉の出ないところはないと言われるくらいに温泉だらけの日本。それ程までに温泉大好き日本人は、世界でも特異な民族である。

では、海外旅行に出かけたときは、どれほどの日本人が温泉を楽しんでいるだろうか。国内なら温泉抜きには考えられない日本人であるが、海外では確実に温泉を忘れてしまっている。

その理由は明らか。海外には温泉が少ないうえに、仮に温泉の出る町があったとしても、そこに日本のような温泉施設がないからである。

あまり知られていないが、実はタイには良質な温泉が多い。知られているだけでも120〜130箇所の自然湧出の源泉がある。

以前カオラック近くの田園で「Hot Springs of

小さな看板を見つけて、立ち寄ったことがあるが、そこは河原から40℃ほどの湧水が、わずかに湧き出ているだけの温泉で、恐らくこの数には含まれていないだろう。

タイで温泉の出る場所は、北はチェンライ、チェンマイ、パライ、メーホンソーン、南はカンチャナブリ、ラチャブリー、ラノーンなど、マレー半島を下っていく線上に点在している。

ビーチリゾートとして良く知られているバンガーやクラブにも源泉がある。いずれも名の知れた観光地であるにもかかわらず、温泉を観光資源としている様子はなく、日本のような温泉施設は存在しない。

年間120万人の日本人がやってきて、住んでいる日本人も5万人に達するタイであっても、日本人がタイで温泉を楽しんでいる話はまず聞かないのが現状である。

当然、日本から温泉目的でタイ旅行に行こうとする人もいない。温泉大好き日本人としては、目の前で流れ出る温泉水が勿体なく感じてしまう。

タイ人にとって温泉のイメージは、足湯と温泉卵である。男女共用、水着着用の温泉プールはあるが、休日ともなれば子どもたちの遊び場と化している。

個室でバスタブに浸かる施設もあるにはあるが、日本人の温泉イメージとはかけ離れたレベルのものであるし、タイ人にしてもそれほど流行っているようには思えない。もともと、そういった施設の利用者は、大抵地元の人たちに限られている。

しかし、最近どうやらタイ人の中で温泉に対する意識が変わりつつある。日本の日帰り温泉のような施設や、規模は小さいながらも温泉宿が生まれ始めており、タイ人旅行者の利用も増えてきているようだ。

タイの温泉町として最も有名なラノーン、マ

因みにこのホテルの各浴室のお湯は温泉である。最近では、温泉をテーマにしたビーチリゾートのホテルも登場しているし、タイ北部の温泉地にも温泉宿がオープンし始めているという情報もある。

タイに温泉ブームが来るのでは...? と思い始めた頃、バンコクの中心地スクンビットソイ26に東南アジアで最初の本格的スーパー銭湯「湯の森」がオープンした。バンコクに住む日本人だけでなく、日本の温浴文化に興味のあるタイ人にも話題沸騰で人気急上昇中という。

そして、「湯の森」はラノーンの温泉を利用している。スーパー銭湯でタイの温泉ブームに火が付くとすれば、日本の温泉技術やオペレーションノウハウをタイで生かすことができ、日本にとっても新たなビジネスチャンス到来ということになる。タイ温泉ツアーが、旅行会社のパンフレットに掲載される日は近いかもしれない...。

(土橋 告)